

次なる戦いに向かって進め その1

次なる戦いは、何だろうか。それは一つだ。すべて未来を切り開く闘いだ。

冬の真ただ中、もう桜の木は、満開の花を拓くべく、地中から広く養分を吸って、樹液を濃くし、その幹や枝を伝えて、花を咲かすべく樹液を吸い上げている。その樹液は、一年で唯一の時期であるのだが、濃厚な桜色を染め上げる色となるという。

志村ふくみという染色家について書いた大岡信の「言葉の力」というエッセイがある。高校時代に、1年生の教科書に掲載されていた記憶がある。

言葉の力

大岡 信

人はよく美しい言葉、正しい言葉について語る。しかし、私たちが用いる言葉のどれをとってみても、単独にそれだけで美しいと決まっている言葉、正しいと決まっている言葉はない。ある人があるとき発した言葉がどんなに美しかったとしても、別の人があるとき用いたとき同じように美しいとは限らない。それは、言葉というものの本質が、口先だけのもの、語彙だけのものではなくて、それを発している人間全体の世界をいやおうなしに背負ってしまうところにあるからである。人間全体が、ささやかな言葉の一つ一つに反映してしまうからである。

京都の嵯峨に住む染織家志村ふくみさんの仕事場で話していたおり、志村さんがなんとも美しい桜色に染まった糸で織った着物を見せてくれた。そのピンクは淡いようでいて、しかも燃えるような強さを内に秘め、はなやかで、しかも深く落ち着いている色だった。その美しさは目と心を吸い込むように感じられた。

「この色は何から取り出したんですか」

「桜からです」

と志村さんは答えた。素人の気安さで、私はすぐに桜の花びらを煮詰めて色を取り出したものだろうと思った。実際はこれは桜の皮から取り出した色なのだった。あの黒っぽいごつごつした桜の皮からこの美しいピンクの色が取れるのだという。志村さんは続いてこう教えてくれた。この桜色は一年中どの季節でもとれるわけではない。桜の花が咲く直前のころ、山の桜の皮をもらってきて染めると、こんな上気したような、えもいわれぬ色を取り出せるのだ、と。(後略)

今、君たちの体を流れる血流と髄液の色は、まさしくえもいわれぬ紅潮した桜色なのだろう。君たちの存在全体の一刻も休むことのない活動の精髓が、春という季節に合格という一つの現象を生み出すにすぎないのである。花となる結果に向けて、君たちの存在全体が、その花という結果だけでなく、身体全身を使って懸命に花開こうとする姿の表れであるのである。その一滴は、染め上げれば、花開くその色であるに違いないのである。(以下続く)